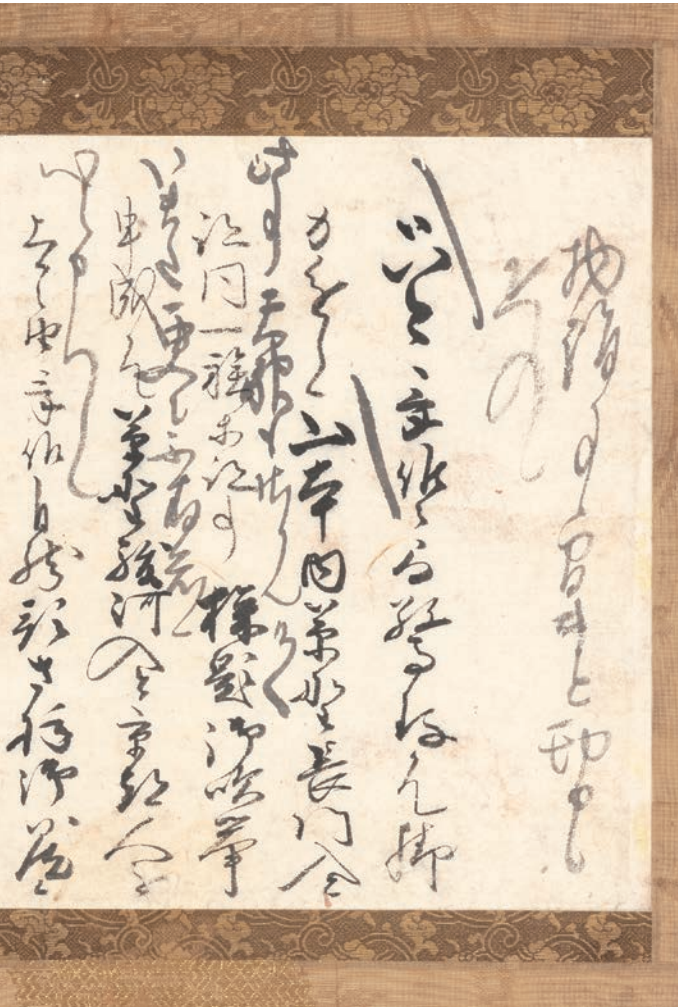


## 史料紹介と研究

今川了俊勘返田原氏能書状  
——豊後田原氏と筑後国竹野荘——

堀川 康史

田原氏は豊後国国東郡田原別符（現大分県杵築市）を名字の地とする大友氏の有力庶家である。<sup>①</sup>戦国期に同氏が滅亡すると、その伝来文書は一族の入江氏に伝わり、それらは上田純一校訂『入江文書』（史料纂集、続群書類従完成会、一九八六年）として刊行されている。一方、天保十四年（一八四三）の『碩田叢史』が入江孫三郎文書について「ゆゑありて此分所々散在せし」と記すごとく、<sup>②</sup>田原氏関係史料は近世の段階で巷間に散逸していたと思しく、現在では研究機関・蒐集家の所蔵となっているものも少なくない。本稿で紹介する今川了俊勘返田原氏能書状（史料一、左図）もそうした散逸文書の一つで、本誌刊行の時点で個人の蒐集に帰している。



本書状は二紙を貼り継いだ状態で掛軸装とされている。料紙は楮紙で、法量は縦二八・二cm、横は三九・五cm（第一紙）・三三・四cm（第二紙）。表装のため天地左右を断たれている（宛所は散逸時に切断か）。花押の寸法は氏能花押縦二・三cm×横三・八cm、了俊花押縦四・〇cm×横四・三cmである。了俊の勘返は筆跡と青墨の使用から自筆と判断される。

差出人の氏能は田原氏の当主で、了俊の片腕ともいべき事績を残した人物である。書状の内容は、①草野駿河入道が了俊の吹挙を得て、筑後国竹野荘山本郷（現福岡県久留米市山本町）内の草野長門入道跡を賜ろうとしたことに対する抗議、②同国発心城（現久留米市草野町）の守備に関する報告の二点である。これに対し了俊は、①草野駿河入道の吹挙についてはまったく身に覚えがなく、②今月中に発心城に行くのでそれまで待つように、と答えている。草野駿河入道は康暦元年（一三七九）に探題奉行人とともに肥前国松浦波多村地頭職の遵行使節を務めたり、至徳元年（一三八四）には肥前河上社の造営につき段銭・幡の納入を了俊から命じられたりするなど、その活動は探題被官とも評しうるものがある。氏能が了俊と駿河入道の関係に疑いの目を向けたのも無理はない。

史料一 今川了俊勘返田原氏能書状（勘返は「」内に示す）

「物詣事候間きと勘申候、

恐入候、」

只今承候之間驚存候て、脚

力進之候、山本内草野長門入道

「此事天神も御らん候へ、」

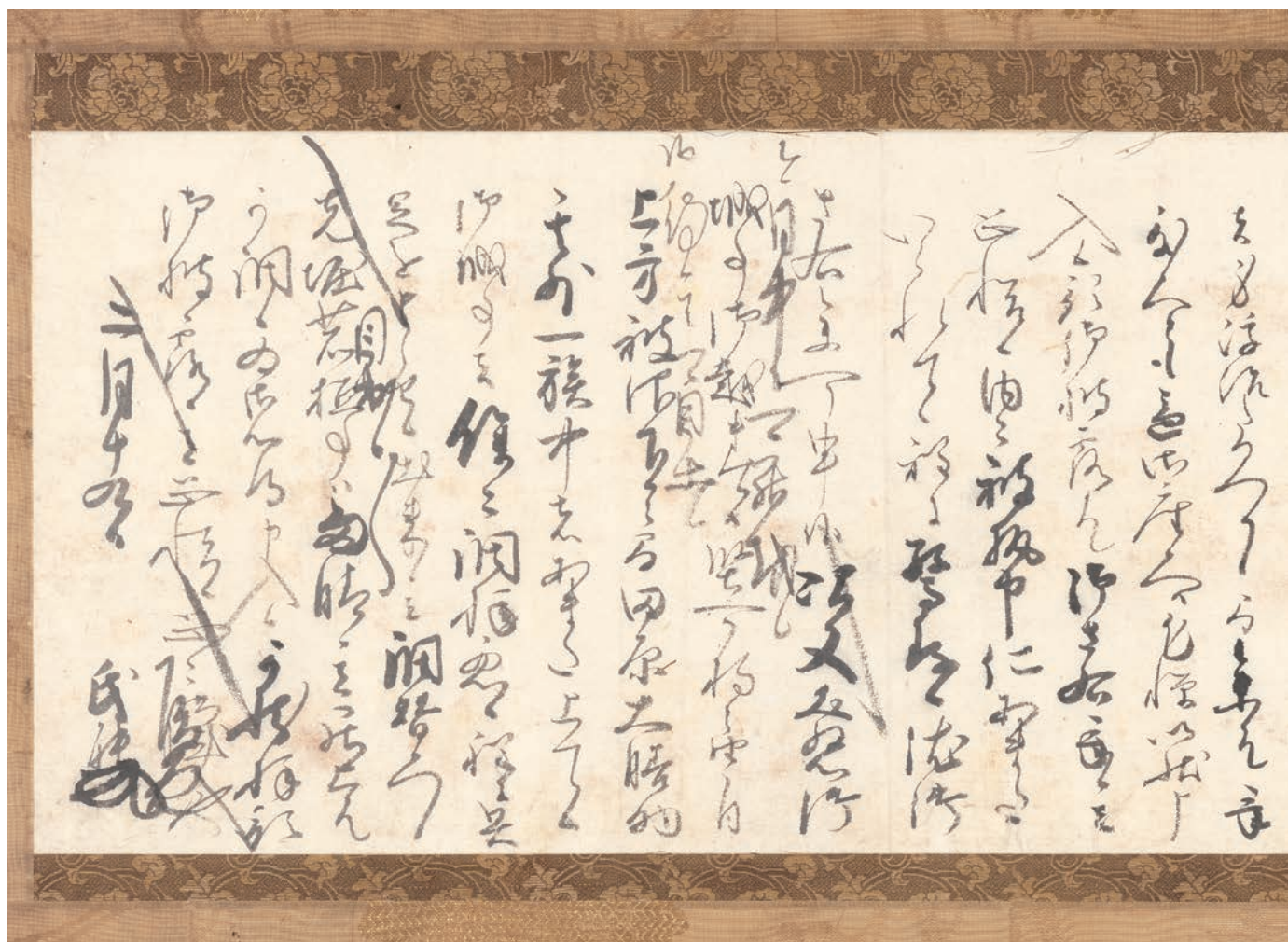
跡・同一族等跡事、探題御吹挙

「いまた更々不存知候、」

申成候て、草野駿河入道京都人（説力）を

「心え申へく候、」

上候之由承候、自然預左様御沙汰候



者、身浮沈たるへく候間、参候て承

度候へとも、急御座候へハ、乍憚以状申

入候、預御披露候て、御左右承候者

恐悦候、内々被執申仁あまた

いられて候程に驚存候、依御

左右参可申候、次又発心御

「今月中に可罷越候、」

城事御越までハ堅可持之由、自

「御待候者、可目出候、」

上方被仰下候之間、田原大膳助・

其外一族中者あまた上て候、

御城事者余に調様悪候程に、具

足をとらせ候、出来候者、調替候へく候、

「目出候く、」

先堀荒恒事ハ、雨晴候者罷上候て

可調候、為御心得申入候、可然様預

御披露候者恐悦候、恐々謹言、

「了俊（花押）」

二月十九日

氏能（花押）



史料一の関連史料が『入江文書』に残っている。

## 史料二 今川了俊<sup>6</sup>挙状

田原下野守氏能申、筑後国竹野庄内草野村草野長門入道跡小地頭職事、依為闕所、号名字地、草野駿河入道以御判預之候了、雖然惣地頭職事、氏能以御下文先日拝領候上者、重安堵事申候、可為如何様候乎、任御下文可致沙汰候哉、以此旨可有御披露候、恐惶謹言、

五月八日

沙弥了俊（花押）

進上  
武蔵守殿

史料二は管領細川頼之に宛てた了俊の挙状で、草野長門入道跡の小地頭職が名字の地であることを理由に駿河入道に預けられたが、田原氏が下文を根拠に惣地頭職の安堵を求めている、と述べて対応を依頼している。史料一を受けて発給されたと思われるので、以下では合わせて年次を考察する。

まず上限については、応安八年（一三七五）二月日付田原氏能軍忠状<sup>7</sup>などによって氏能の動向を確かめると、了俊の downward から応安八年（永和元年）までの間の二月に田原氏が発心城に拠ったことは見えないので、史料一は翌永和二年（一三七六）以後と考えられる。下限については、史料二の宛所である管領細川頼之が康暦元年（一三七九）閏四月に失脚していることから、その前年の永和四年（一三七八）となる。以上をまとめると史料一・二の年次は永和二～四年の間に絞り込むことができる。

そのうえで注目したいのは、史料一において了俊が今月（二月）中に発心城に行くこと述べている点である。この記述を手がかりに史料を搜索すると、宮内庁書陵部所蔵桂宮本『道ゆきぶり』の「永和四年三月十八日、於筑後国竹野庄内善道寺陳書之了<sup>8</sup>」という奥書が注目される。善導寺は草野氏を開基とする山本郷内の寺院で、発心城からは指呼の間にある。詳細は不明であるが、南朝方の人物が「了俊為籌策去月着善道寺<sup>9</sup>」ことを伊予河野氏に報じた四月十三日付書状<sup>10</sup>写によれば、筑後の征西府方との対陣があった

ようである。

以上のことから史料一・二は永和四年（一三七八）の可能性が高いと思われる<sup>11</sup>。このように考えると、山本郷内における千葉氏被官の押領を咎めた次の了俊書状の位置づけも明確となる。

## 史料三 今川了俊<sup>12</sup>書状

田原下野守申、筑後国竹野庄内山本郷内籠野・西泉・蜷河等事、父打死之間、為恩賞拝領地候間、重拝領候、遵行以後尚御家風仁押領之由歎申候、無勿躰候、任御教書以下旨、可被止煩候、恐々謹言、

〔永和四〕

五月二日

了俊（花押）

千葉殿

史料一～三を全て永和四年に発給されたものと考え、この頃田原氏能は竹野荘の支配の安定化を図っていたことになる。氏能は翌康暦元年七月に竹野荘を含む自身の所領を嫡子の徳一丸（後の親貞）に譲っているから<sup>13</sup>、一連の訴えの背景には、譲与に先立ち所領をめぐる紛争を解決しておきたいという氏能の思惑があったのかもしれない。

最後に蛇足であるが、田原氏と竹野荘あるいは草野氏との関係に関する史料を掲げておく（史料四・六は『南北朝遺文 九州編』未収）。

## 史料四 今川了俊書状断簡<sup>14</sup>

草野長門□□□地庄年貢事、宜依先例候、雖然時分不可然之由存候間、差をかるべきよし申候処、今年事不可有（以下欠）

「草野文書」の一通である。冒頭のみ断簡だが、筆跡により了俊書状と判断できる。史料四の内容については次の史料が参考になる。

# 史料五 今川了俊書状<sup>15</sup>

草野長門知行分年貢事、依御沙汰於地下可及喧嘩候由其間候間、先止地下動乱、御申あるへき子細候ハ、承候て、任運可成敗候由申候き、今如御代官申候者、地下乱入かせき等事、無跡形候云々、然者定可為無為候哉、目出候、此上者草野与力等事、又候ハしと存候、於庄年貢免之事者、御帰陳時承候て、可加成敗候、一日自長瀬方進候し状ハ、た、地下喧嘩いたし候ハ、やめられ候へまでの事にて候、つと二さる事候ハぬよし御申候上ハ、殊二日出候、恐々謹言、

十二月五日

了俊（花押）

（氏能）  
田原殿 御返事

史料五は、草野長門知行分（長門入道跡のことであろう）の年貢をめぐり「草野与力」と田原氏の間で紛争が生じていたことを示す史料である。本件については田原氏の帰陣後追って成敗を加えるとする史料五の記述を踏まえると、史料四の文意は、年貢は先例によるべき（＝田原氏が収納すべき）であるが、今は時分がよろしくない（＝戦闘中である）のでひとまず差し置いてほしい、といったところになるだろう。

# 史料六 今川了俊書状写<sup>16</sup>

京都御感進之候、目出たく候、將軍御判始にて候間、ことに／＼目出たく候、

承候京都注進事進之候、尤此間御忠ハ京都へも可申入候つる間目出たく候、そのためニ随分委細令申候、又草野用害事、近日承候て、用心等事能々草野方ニも御談合候て、かたく御持候へく候、尚合力事を申談最中と、將又舟事申下し候、いま在津候哉、今二三日相構／＼またせらるへく候、恐々謹言、

正月廿三日

了俊（花押影）

（氏能）  
田原殿

史料六は『碩田叢史』に収められた一通で、草野氏と談合し「草野要害」を守備せよと田原氏能に指示したものである。年次比定の決め手に欠けるが、内容からいって永和四・五年の合戦に関わる史料である可能性は高い。前掲史料四・五において了俊は、田原氏に対し草野氏との軋轢を差し置くよう指示しているが、その事情は史料六に述べられるごとく、当該地域を押さえるには在来系御家人である小地頭草野氏との協力が不可欠であったからである。惣地頭・小地頭制という九州特有の地頭制度から生じる領主間対立に苦心する了俊の姿が浮かび上がる。

以上、簡単であるが新出の今川了俊勘返田原氏能書状を関連史料とともに紹介した。分散した田原氏関係史料の整理など今後の課題は尽きないが、ひとまず紹介を終えることにしたい。最後になるが、貴重な史料の調査と紹介をお許しくださったご所蔵者にお礼を申し上げます。

## 註

- （1）南北朝期の田原氏については、荒川良治「室町幕府小番衆豊後田原氏の成立」『鷹陵史学』一八号、一九九二年）、同「南北朝内乱と田原氏の発展」『日本歴史』五八〇号、一九九六年）参照。
- （2）東京大学史料編纂所架蔵謄写本『碩田叢史』三（四一四〇・一一三六―三三）。
- （3）草野氏については樋口一成編『中世豪族草野氏 栄華の残照（改訂版）』（久留米市草野歴史資料館、二〇一八年）、草野村については外山幹夫『大名領国形成過程の研究』（雄山閣出版、一九八三年）三三二―三三五頁参照。
- （4）『肥前有浦文書』（『南北朝遺文 九州編』五五七八号）。以下、『南北朝遺文 九州編』は『九州』と略記する。
- （5）『肥前河上神社文書』（『九州』五八三三三三）。
- （6）『豊後入江文書』（『九州』六四六五五五）。
- （7）『豊後入江文書』（『九州』五一七一一一）。
- （8）康暦元年（一三七九）の足利義満袖判下文に、竹野荘内東郷・山本郷は「宇都宮常陸前司綱跡」とある（『豊後入江文書』『九州』五五八一五五）。宇都宮守綱の離反は応安七年（一三七四）正月の出来事である（『豊前門司文書』『九州』五一六九号）。『大友田原系図』は竹野荘内地頭職の給与を貞治六年（一三六七）と記すが（『入江文書』三〇六頁）、それを裏付ける史料は挙げられていない。

(9) 『道行触』(函架番号:五〇二一七四)。国書データベースにて画像閲覧可能(<https://doi.org/10.20730/100290249>)。

(10) 『安芸築山文書』(『九州』五三九四号)。本文書は従来永和三年に比定されているが、『道ゆきぶり』の記述にかけて永和四年とすべきであろう。

(11) 永和四年に善導寺を経て征西府の拠点肥後菊池に迫った探題勢であるが、託麻原の戦いで敗北を喫し、戦線は耳納連山一帯に移る。田原氏能も一連の合戦に従事し、翌康暦元年五月には草野城攻略の軍功を称える足利義満御判教書が与えられている(豊後草野文書『九州』五五四三号。「大友家文書録一」『大分県史料』三一、二二一号も参照)。史料一・二の年次を康暦元年の合戦と関連づけることも可能であるが、その場合了俊は閏四月十四日の細川頼之失脚を知らずに五月八日付で挙状(史料二)を書いたことになる。政変の報は速やかに了俊のもとにもたらされたと考えられるので、史料一・二は康暦の政変以前の発給と考えておきたい。

(12) 「豊後大分大学附属図書館文書」(『九州』五四七三三号)。

(13) 「豊後入江文書」(『九州』五五八一号)。

(14) 「草野文書」下巻一七号(『大分県史料』一一三)。

(15) 「豊後入江文書」(『九州』六七五三三三)。

(16) 「碩田叢史」三。「大友家文書録」に本文書の断簡が収録される(『大分県史料』三一、二〇五号)。

(17) 惣地頭―小地頭制については、清水亮『鎌倉幕府御家人制の政治史的研究』(校倉書房、二〇〇七年)第五・六章を参照。

【付記】本稿は科学研究費補助金(23K12273・24K00113)および本センター「中世花押の編年研究」プロジェクトの成果である。

## 史料編纂所「二〇二五年カレンダー」のご案内

このたび、史料編纂所の二〇二五年カレンダーが完成しました。今年「誓約・約束」をテーマに本所所蔵の中世史料を紹介しました。表紙に選んだのは、慶長四年(一五九九)に書かれた起請文(神仏への誓約書)です。「庄内の乱」と呼ばれる島津氏の内紛に際して、当主夫妻に仕える侍女たちが二心なきことを誓ったものです。署名の下に捺された血判の跡が緊迫した様子を生々しく伝えていきます。裏表紙に選んだのは、若き日の武田信玄(晴信)が記した起請文です。小姓に言い寄ったことを否定する内容で、戦国武将の私生活を語る史料として知られています。

このほか本カレンダーには、さまざまな内容の誓約や、誓約に関する人々の意識が読みとれる史料を掲載しました。果たしてその誓約は本当だったのか、嘘だったのか、約束は守られたのか、破られたのか――などと想像をめぐらしながらご覧いただけると、よりいっそうお楽しみにいただけるのではないかと思います。

体裁はA4判中綴じ(上下見開きで縦A3判)のカラー印刷で、解説二頁を含む一六頁仕立てです。一部五一〇円(税込)にて、東京大学コミュニケーションセンター(史料編纂所の向かい)で販売いたします。

(広報委員・堀川康史)

## 2025 CALENDAR



島津氏内紛の起請文(島津氏家系図) / A blood seal (Shibubiki) on a historical document (Shimazu family genealogy)

東京大学史料編纂所  
HISTORIOGRAPHICAL INSTITUTE, The University of Tokyo